新春特別企画　グロ

日本の国際化を教育で

●グローバル4大学
国際基督教大学(ICU)　早稲田大学国際教養学部(SILS)
国際教養大学(AIU)　立命館アジア太平洋大学(APU)

立命館アジア太平洋大学(APU)
「躍動する世界へ臆せず飛び込む力を」

―各大学の特性についてお聞かせください。

中嶋　大学教育の軸になるのはカリキュラムですが、その前提条件として、大学の組織自体のガバナンスがうまく機能していかなければ、グローバルな人材を養成することはできないでしょう。

本学はマネジメント体制を一から構築し、基本的に教員は公募採用の競争人事で、3年間の任期制です。日本には今までなかった制度ですが、何らかの改革を断行するためには、大学をある種の競争と評価のなかに置くのは、むしろ当然だと考えています。

是永　高等教育の国際化が声高に叫ばれたのが1990年代後半でした。当時から経済界に対する巻き返し策の一つとして設立された本学は、創立当初から産業界・経済界とは密接な関係を築いています。

社会のニーズと期待を背負いながら、「ニーズに合う人材を送り出す」という気概で、教職員が一丸となって取り組んでいるのは、本学の誇れる特性だと思います。

森田　当初から、英語のレベル差があるなかで、どこをターゲットにシラバスを組むかという課題がありましたが、定員の半数を帰国生や海外からの留学生が占めており、そうした学内環境が、日本人学生の語学力を引き上げる原動力にもなっていると自覚しています。

鈴木　外国の大学と単位互換を行うには教育の質を保証し、国際的に認められた機関の認証を受けることが必要です。本学では50年以上、このことを念頭に置いて努力してきました。その実績が本学の強みでしょう。

また、留学生と日本人学生が対話をしながら、ケース・メソッドやプロジェクト型授業を通じて、自分は何をしたいのか、何に向いているのか」と大いに迷い、悩む時間や機会を学生に与えることも忘れてはなりません。

制度的に偏差値や専攻で学生を分断する手法は、便利なようで、反面、彼らのポテンシャルの百分の一も分からないまま、社会に送り出すことになるのではないかと危惧しています。

―今後の4大学の取り組みについてお聞かせください。

鈴木　留学生同様、シラバス互換の交流を4大学間で早く進めていきたいですね。EUのエラスムス計画では、学生がヨーロッパ中を流動し、大学を評価することで、大学のレベル向上の一翼を担っています。

中嶋　すでに4大学間でルートからキャリアまで実施した取り組みとしても連携すべきかどうかもこれからの課題です。

是永　国際大学として展開する場合、窓口業務やシステムの考え方が通常の大学運営と全く異なります。

我々の連携の基盤となったのは事務職員同士の交流ですが、昨年は、AIUと2大学間で国内留学プログラムを開設し、セメスター留学や冬季プログラム等で修得した単位を認定する取り組みが稼動し始めました。これを残りの2大学まで広げて、4大学全体で単位化する動きになれば、競合と協力が並存する興味深いシステムに育っていくはずです。

中嶋　すでに4大学間でルートからキャリアまで実施した取り組みとしても連携を図っていければ最高でしょう。

国際教養大学(AIU)
「自らの限界への挑戦が世界の扉を開く」

大切なのは、地域や国の特性を強調したプログラムで、多様化を図る必要があるということ。そのためには、4大学以外、例えば国立大学とも連携できればいいですね。

森田　現在でも、事務担当者間では、頻繁に連携を図っており、「多くの留学生」「英語で教育」「学生のリクルート問題」「キャリア教育の方向性」など、4大学が曖昧に同質化せず、お互いの強みを強化するのが重要です。可能であれば、4大学間で連携すべきかどうかもこれからの課題です。

運営には細かな取り決めが必要ですから、事務担当者間の交流で4大学がリクルートからキャリアまで連携すべきかどうかもこれからの課題です。

中嶋　カリキュラムは対外的にも通用するものでなければなりません。併せて、セメスター制度を導入して、9月入学を可能にすることも一つの方策でしょう。

学生が留学先で単位を修得する過程の苦労は、人間を大きく成長させますから、きちんとクレジットトランスファー(単位互換)する仕組みでの運用が欠かせません。

鈴木　実感として、留学とは、質の保証された海外工場で全人力教育のある部分を加工してもらうことです。海外からの留学生も、ICUという加工工場で手を加え、質を高めて送り返す義務があります。

海山の麓で、学生たちが取り組んだフィールドワークが挙げられます。山間地帯の集落で合宿を行い、伝統芸能や残存する農家の文化をいかに継承し、世界にアピールするかという、非常に充実したプロジェクトが行われました。

今後は、4大学間での学生の交流や単位互換の拡充などが課題として挙がるでしょうし、教職員の相互派遣もできれば面白いかもしれません。

こうした我々4大学の取り組みが他大学を巻き込めれば次の展開が見えてきますし、実際に入れて欲しいという声もありますが、クリアすべき部分も考えて連携を図っていけれ

―リベラルアーツでは、対話が非常に重要です。これからのグローバルな時代では、個人としての発信力が問われますから、少人数クラスで対話を重視した教育が必要不可欠です。

リベラルアーツの根元である「全人力」の観点からいうと、社会科学的素養も自然科学的素養も人文科学的素養も備えていて、かつバイリンガルであるというのが一つの理想です。学生は一人として同じ個性ではありませんから、2008年に開始したメジャー制のもとでは、百花繚乱の人物が育成されていくことがカリキュラム上担保されていると考えています。

これを私は、「雑木林型の教育」と言っています。雑木林のように、太陽の光を求める切磋琢磨が、キャンパスでなされてこそ成長があると知るべきです。

また、大学の機能として「知識を授ける」「学友関係を広げる」ことがありますが、「自分は何をしたいのか、何に向いているのか」と大いに迷い、悩む時間や機会を学生に与えることも忘れてはなりません。

制度的に偏差値や専攻で学生を分断する手法は、便利なようで、反面、彼らのポテンシャルの百分の一も分からないまま、社会に送り出すことになるのではないかと危惧しています。

―今後の4大学の取り組みについてお聞かせください。

鈴木　留学生同様、シラバス互換の交流を4大学間で早く進めていきたいですね。EUのエラスムス計画では、学生がヨーロッパ中を流動し、大学を評価することで、大学のレベル向上の一翼を担っています。

中嶋　すでに4大学間でルートからキャリアまで実施した取り組みとしても連携を図っていけれ

国際教養大学(AIU)
「自らの限界への挑戦が世界の扉を開く」

大切なのは、地域や国の特性を強調したプログラムで、多様化を図る必要があるということ。そのためには、4大学以外、例えば国立大学とも連携できればいいですね。

森田　現在でも、事務担当者間では、頻繁に連携を図っており、「多くの留学生」「英語で教育」「学生のリクルート問題」「キャリア教育の方向性」など、4大学が曖昧に同質化せず、お互いの強みを強化するのが重要です。可能であれば、4大学間で連携すべきかどうかもこれからの課題です。

運営には細かな取り決めが必要ですから、事務担当者間の交流で4大学がリクルートからキャリアまで連携すべきかどうかもこれからの課題です。

中嶋　カリキュラムは対外的にも通用するものでなければなりません。併せて、セメスター制度を導入して、9月入学を可能にすることも一つの方策でしょう。

学生が留学先で単位を修得する過程の苦労は、人間を大きく成長させますから、きちんとクレジットトランスファー(単位互換)する仕組みでの運用が欠かせません。

鈴木　実感として、留学とは、質の保証された海外工場で全人力教育のある部分を加工してもらうことです。海外からの留学生も、ICUという加工工場で手を加え、質を高めて送り返す義務があります。

海山の麓で、学生たちが取り組んだフィールドワークが挙げられます。山間地帯の集落で合宿を行い、伝統芸能や残存する農家の文化をいかに継承し、世界にアピールするかという、非常に充実したプロジェクトが行われました。

今後は、4大学間での学生の交流や単位互換の拡充などが課題として挙がるでしょうし、教職員の相互派遣もできれば面白いかもしれません。

こうした我々4大学の取り組みが他大学を巻き込めれば次の展開が見えてきますし、実際に入れて欲しいという声もありますが、クリアすべき部分も考えて連携を図っていけれ

ICU
本当のリベラルアーツ教育が世界を変える

鈴木 典比古 学長　*Norihiko Suzuki*

リベラルアーツでは、対話が非常に重要です。これからのグローバルな時代では、個人としての発信力が問われますから、少人数クラスで対話を重視した教育が必要不可欠です。

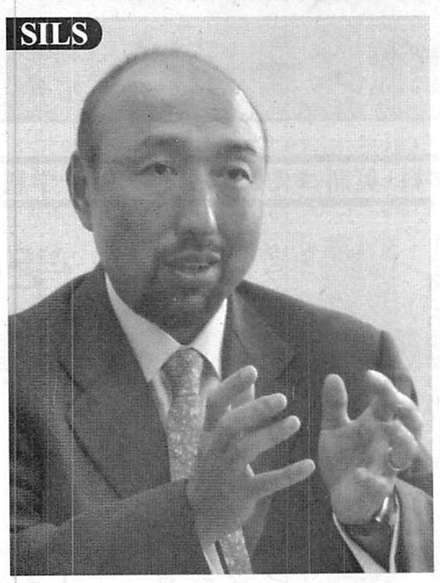
リベラルアーツの根元である「全人力」の観点からいうと、社会科学的素養も自然科学的素養も人文科学的素養も備えていて、かつバイリンガルであるというのが一つの理想です。学生は一人として同じ個性ではありませんから、2008年に開始したメジャー制のもとでは、百花繚乱の人物が育成されていくことがカリキュラム上担保されていると考えています。

これを私は、「雑木林型の教育」と言っています。雑木林のように、太陽の光を求める切磋琢磨が、キャンパスでなされてこそ成長があると知るべきです。

また、大学の機能として「知識を授ける」「学友関係を広げる」ことがありますが、「自分は何をしたいのか、何に向いているのか」と大いに迷い、悩む時間や機会を学生に与えることも忘れてはなりません。

制度的に偏差値や専攻で学生を分断する手法は、便利なようで、反面、彼らのポテンシャルの百分の一も分からないまま、社会に送り出すことになるのではないかと危惧しています。

SILS
マルチカルチャーな国際舞台へ新研究科構想



森田 典正 学部長　*Norimasa Morita*

2004年当時、国際教養学部の開設にあたり、真の意味でのリベラルアーツを創り上げることを一使命として掲げました。そのためには、教養教育の再編とソクラテスメソッドや少人数教育による、教員と学生の相互作用を引き起こすことが欠かせないと考えました。定員600人の大規模なスタートも、早稲田だからこそ社会に対して果たすべき役割があると考えた結果です。

5つの原則として、「リベラルアーツを英語で教育」「インタラクティブな少人数教育の展開」「マルチリンガル、マルチカルチャーの集団形成」「複数言語を含む包括的な英語教育」「1年間の海外留学」があります。

現在、目標であった留学生比率3分の1を達成し、インターナショナルなコミュニティが形成されつつあります。本学部の入学生は、日本の高等学校出身者が多いのですが、在学中にTOEFL-ITP換算値で約40点上昇というデータがあります。海外留学も含めて、本学部の英語力の引き上げに寄与しているのは間違いないでしょう。

今後は、教養学部のみで完結するのではなく、大学院進学でさらに高等教育が完結することで日本人学生も出てきており、頼もしい限りです。

また、数年後に研究者と実務家、その両面の養成が大きく超える学生が大学院へ進学しますので、本学部の3割程度の大学院進学を目標値で掲げています。留学生の多くは大学院を志望しますし、入学時から修士やMBAを目指す日本人学生も出てきており、頼もしい限りです。

今後は、教養学部のみで完結するのではなく、大学院進学でさらに高等教育が完結することで日本人学生も出てきており、頼もしい限りです。

また、数年後に研究者と実務家、その両面の養成が

新研究科構想

海山の麓で、学生たちが取り組んだフィールドワークが挙げられます。山間地帯の集落で合宿を行い、伝統芸能や残存する農家の文化をいかに継承し、世界にアピールするかという、非常に充実したプロジェクトが行われました。

今後は、4大学間での学生の交流や単位互換の拡充などが課題として挙がるでしょうし、教職員の相互派遣もできれば面白いかもしれません。

こうした我々4大学の取り組みが他大学を巻き込めれば次の展開が見えてきますし、実際に入れて欲しいという声もありますが、クリアすべき部分も考えて連携を図っていけれ

と身に付けなければならないのです。

「Only one is number one.」。その意味では、語学学習や留学は、苦労しながら、その困難を乗り越えて、自身が目指す姿に近づくことのできる力を醸成していきます。

ICUは、教職員が一丸となって、学生に「留学しよう。長い人生には困難に飛び込む時期も必要」とモチベーションを高めています。その結果、来年度の留学希望者数は大幅に増える見込みです。

巷間、喧伝されるように、「若者の内向き志向」「就職活動に影響」といったことに左右されて、世界に飛躍する自分を創る機会を逃してはなりません。

多様なリベラルアーツ教育を能動的に連動させ、世界に飛躍する人材育成は、ICUしかできない――。そんな気概と覚悟を持って地球規模のメッセージを発信していきます。

可能な新研究科の立ち上げを計画しています。この研究科から、専門分野を世界で背負って立つような有為な人材を生み出したい。もちろん、国際語である英語で学ぶからこそ、修士レベルが必須の国際公務員や国連機関での活躍を展開できるわけで、国際社会で日本人としての立ち位置を、本学部卒業生たちに確立して欲しいと思います。

現在でも、少人数英語教育を展開する中で、単なる語学力ではないコミュニケーション能力が培われています。結果的に、卒業生の進路として国際系部署や海外展開プロジェクトへの配属、外資系等への進出に繋がったのは、我々に対する評価の一端なのだろうと自負しています。

本学部の特性を十分に活かしつつ、国際的展開を担う高等教育機関として、地球社会における知的基盤の構築を実現すべく努力していきます。

～大学の国際化をフルサポート～

世界大学ランキングの順位アップに貢献

きめ細やかな英文校正、論文投稿のサポートサービスを通じて、よりインパクト・ファクターの高いジャーナルでの論文掲載を可能にします。

- 日本人研究者が執筆した学術英語論文を 80,000 稿以上校閲
- 19,000 名以上の研究者が利用
- 多数のジャーナルで専属エディターを担当
- 大学出版部や大学が出版した書籍の英文校閲を多数手掛ける
- 日本の大学関連会社や大学出版部と提携

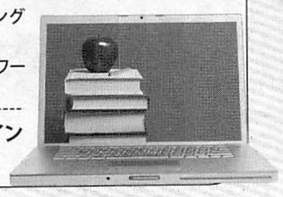
学術論文の校閲会社として、専門分野に特化した 90 名以上の社内専属エディターを抱えています。

英文ライティング教育

実績例(大学職員向け)
1)「英文ビジネス・E メール ライティングコース」→国立大学研究室の秘書研修に提供
2)「教職員向け事務実務 英文ライティングコース」→有名私立大学教職員 100 名以上の研修に導入

実績例(学生・若手研究者向け)
1)「英文学術論文の書き方講座」→国立大学に提供
2)「化学・物理系のパラグラフ・ライティングコース」→有名私立大学への提供
3)「国際コミュニケーション手法」セミナー・ワークショップ→ 2009 年開催実績 5 件

講師と 1 対 1 でやり取りできるオンライン受講型の英文ライティングコースです。



【新サービス】インド人留学生の誘致サポート

インド人留学生誘致に向けたコンサルティングやサポートサービスを開始しました。

地方自治体のムンバイ駐在事務所機能を受託運営した経験から、インドにおける日本の大学の PR 活動の力になれます。

入学案内やホームページの英語化サポート

- ターゲット層を想定した内容で、翻訳・校閲・リライトから各種デザインの作成を行います。
- 海外読者が魅力的に感じるデザインから組版を行っています。

サービス詳細はホームページを覧ください。www.cactus.co.jp/daigaku

ed'tage™ | CACTUS Education　Cripton | CACTUS Medical

無料相談を随時受け付けております。Tel: 03-6269-9550 |E-mail: info@cactus.co.jp